

## 肺がんを患う

小嶋 祥三

肺がんの手術を 2008 年 1 月 21 日に受けた。今年 (2014 年) で 7 年目に入った。これまで何事もなく経過してきている。5 年間の危険期間は過ぎたので、一応の治癒というか寛解とっていいのだろう。日記やメモをもとにこの間のことを振り返ってみようと思う。

### 気管支鏡検査まで

勤務先の大学では毎年秋に定期健康診断があった。これまで、年齢相応の劣化はあるものの、特に問題なく経過してきた。ところが、その年 (2007 年) は診療所から一通の手紙を受け取った。肺に問題がありそうなので、診療所に来るようにとのことで、水曜日と指定してあった。まず思い浮かんだのは肺がんだった。数年前に京大・霊長研の同僚が肺がんで亡くなっており、この年の春先に大学時代の同級生も同じ病で亡くなっていた。二人とも喫煙者だった。私は煙草をはるか昔に止めているし、何の自覚症状もない。何だろう？と訝った。ネットで肺がんについて調べ、一通りの知識は得たものの、自分がこの病を患っていることには半信半疑、というか、現実的に考えられなかった。

翌週の水曜日 (10 月 22 日) の朝に診療所に行った。レントゲン写真を見ながら M 先生は右肺上部に何かあるという。仔細に見ると、確かに、左より右肺の方が白いような気がする。細胞や血液が集まっている証拠だという (今思うと、腫瘍があることを遠まわしに言われたのだろう)。昨年の写真も同じ傾向があったかもしれないが、誤差の範囲でよく分らなかったとのことだった。先生はかかりつけの病院はありますか？と尋ねてきた。ないと答えると、今日の午後に勤務先の大学病院に行きませんか？との提案があった。随分と急な話だなと思ったが、講義や会議の予定はなかったので、病院に行くことにした。この時点で、事は重大だと思い至るべきだったのに、暢気に構えていたように記憶している。

特に不安な気持ちにもならずゆったりと昼食をとり、病院の呼吸器内科に行った。先ず CT 検査を受けた。初めての経験だったと思う。検査が終わりフィルムを渡されたので、診察を待つ間、大きな封筒から取り出して眺めた。一方の肺の上部に白く丸いものが映し出されていた。前日、ネットでみた肺がんの CT 像によく似ていた (普通の X 線の結果と随分と違うので驚いた)。これはエライことになったと思ったものの、実感がない。どこか上の空で、他人事だった。しかし、今考えると、この感覚は衝撃を処理できなかった一種の防衛機制のように思う。そういう性分なのだろう。大分待って、H 先生の診察を受けた。CT の白い円形の像はネットで見たものより輪郭がぼやけて見えた。H 先生からファイバースコープによる精密検査 (気管支鏡検査) を受けるように勧められた。2 泊 3 日の検査入院になるという。無論、直ぐにその手続きをした。この日は心機能検査、肺機能検査、血液検査をした。痰の検査は後日持って行っただが、特に問題ないようだった。

気管支鏡の検査日はいずれ病院から連絡するとのことだった。急に話が進んだので、検

査も直ぐに受けられるだろうと勝手に思っていた。ところがなかなか連絡はなく一カ月が経過した。この間は宙ぶらりんの状態で、アレコレ考えてしまい、最もつらかったように思う。つまり、全く問題がない良性のものから、かなり進んだ肺がんまでいろいろ考えてしまう。この幅の広さがかえって苦痛だった。人間は先を見て行動するが、これでは対応のしようがない。しかし、迷惑をかける可能性が高いと思い、同僚や学生、霊長研の親しかった人たちに現状を報告しておいた。推薦入試の委員を仰せつかっていたが降りさせていただいた。多くの人たちから慰めや励ましの言葉をいただいた。中には、たとえ癌でも初期の癌だから絶対大丈夫と言ってくれた人もいた。私は所謂ネクラの傾向が強いので悪い方へ考えがちだったが、これらの言葉は知らず知らずのうちにおまじないのように効いてきて、心の支えになっていたようだ。病院から連絡が来たのは11月24日で、明後日(26日)に検査入院してくださいとのことだった。

### 気管支鏡検査、PET 検査と診断

26日の朝、病院に着き「入院」の窓口に行った。病室に案内される。前方にビルがあり、手前には背の低いビルが見える病室だ。トイレが別にある。テレビ、電話がついている。当然、ベッドがある。看護師や若い T 先生が挨拶に来た。腕に個人識別用の輪をつけられてしまう。午前中に X 線と血液検査を行う。昼飯を食べていると、多分肺がん専門の So 先生が説明に来た。癌とは限らない、たとえ癌でも手術で取れます、早め早めに対応しましょう、云々。気管支鏡の検査はつらいですが、よろしく。午後、T 先生が鼠径部の動脈から採血をする。そのほか、看護師による薬の説明、アンケート用紙の配布があり、それを埋めていた。アンケートに自分の長所、短所を書く欄があった。両方とも「こだわりのないこと」と記入しておいた。大してすることがなく、入院一日目が終わった。

朝食は抜きで、点滴のチューブを血管に挿入される。体温、血圧の測定、検査着への着替えをした。主治医の Se 先生が検査の説明をする。やはり、キツイ検査だという。麻酔が重要なので、うまくかかるとよいとのことだった。検査中、声はだせないで、苦痛の合図などの注意があった。苦痛は胸膜を傷つけたときに起こるらしい。かん止で組織をとるとき、傷つけることがあるという(肺そのものに痛覚はない)。私の場合は、それ程肺の端に患部があるわけではないので、大丈夫だろうとのことだった。

大分待ったが、11 時頃 6 階の内視鏡センターへ車椅子で行く。そこでも大分(30 分位)待った。それから前室に入れられ、口腔内、咽頭、喉頭部の麻酔を行う。これが結構大変で、何度か咳き込む。しかし、麻酔は重要と言われていたので、こちらも努力する。麻酔後、検査台に横たわり、まな板の鯉になる。

マウスピースをかまされて、気管支鏡が挿入された。目隠しされているので、何も見えない。検査者が「一番狭いところを通った」と話している。結構スムーズにファイバーは入っていく。痛みも、咽ることも殆どなかった。時折、ズーッという感じがあり、ファイバーが前進しているようだった。検査者が A、B とか番号をいっている。気管の枝分かれます

るところかしら。痛みを聞かれることがあったが、組織を採取していたのだろうか。痛みはないと、指で輪をつくる。キツイといわれたが、それ程でもない。しかし、マウスピースを砕かんばかりに咬み続けていた。30分くらいで終了。検査台からゆっくり降りた。しばらく検査室の横の部屋で休み、部屋に戻る。痰に血が混じることもなかった。

夕方、PETの検査を別の施設でやって下さいといわれた。その検査日の打ち合わせがあり、12月1日になった。私がPETは転移の検査だろうかと聞いたら、Se先生はそれに答えず、細胞診断は確実ではないこと、CT像の輪郭がぼやけているなどといった。多分、診断がついていないのに転移とは言えないだろう、患部と転移の両方の検査だろうと推察した。最終的な結果は12月12日にH先生から聞くことになった。2日目はこのようにして終わった。翌朝はうれしい退院だ。PET検査のためのCT画像などを受けとり、私は逃げるように退院の窓口で手続きをした。

12月1日に四谷のメディカル・キューブというところにPETの検査に行った。朝早めに朝食をとり、その後は絶食。アイソトープを静注され、1時間ほど別室で安静にしているように求められる。テレビを眺めて過ごした。ミネラルウォーターを渡され、飲む。放射能を尿から出すようにとのこと。残っていると撮像に影響が出るとのことだった。いよいよ検査。膝を曲げてあげた状態、腕は前に組む。それで撮像の間20分間じっとしていた。終わってからまた20分ほど静かにしていた。帰り際に再び尿を出すことを求められる。放射能を体外に出して、町に戻れということのようだった。これで一連の検査は終わった。どういふ結果かは12日の診察で教えてもらう。

12月12日の朝、借り出したCT写真をもって呼吸器内科にいった。今日はいよいよ診断が下る日だ。診察でH先生から肺癌だったと、結構明るい大きな声で、告知された。早期発見でよかったということだったのだろう。ただ、こちらはおまじないが効いているのか、衝撃を処理しきれなかったのか、そうでしたか、仕方ありませんね、といった感じだった。直ぐに呼吸器外科に行き、今後の段取りをつけましょうという。妻に電話をしたが、冷静に対応してくれた。

外科は初診なので、カルテをつくる。外来に行き、ひたすら待つ。ようやくW先生の診察を受ける。まず、これまでの経過を聞かれた。X線の画像を見ながら、これでよく見つかりましたねと言われた（診療所のM先生に感謝）。そして、CT画像を見ながら説明を受ける。早期のがんで、一箇所のみ、転移はないだろうとのことだった。1ヶ月おいても問題ないと思うが、3ヶ月おくと心配だ、来年早々手術しましょう、ということで、2週間の手術入院の手続きをした。手術日はやはり病院からの連絡を待つことになる。なお、12月18日に脳のMRIを撮った。脳はPETでは分かり難い。肺がんは脳に転移しやすいが、特に問題なかったようだ。ということで、当面Stage Iの肺がんと考えていいのだろう。自覚症状がない肺がんの早期発見は幸運だ。不幸中に赤飯を炊くような感じだろうか。2008年になり、1月12日に病院から連絡があつて、15日に入院ということになった。

## 入院と手術

1月15日(火)の午前中に入院する。手術は21日の予定である。入院手続き後、病室に案内してくれる。新棟7Fの5759室。眺めがよい。丹沢の山々、富士山がみえる。新宿の高層ビル群も見える。午前中に心電図、レントゲン、採血、午後に肺機能検査を行う。午後だったか、動脈血を採取。執刀のW先生、主治医のI先生がやってこられた。翌16日にいろいろな説明をビデオで受ける。リハビリ、麻酔、これからの予定など。17日午前中にリハビリに行き、呼吸について前もって話を聞く。地下の売店でスーフルという術後の呼吸訓練器を購入した。午後は術前の造影剤を入れてCT撮影。フィルムを渡してもらったが、検査者が私のことを憐れんでいるように見えた。霊長研の中村克樹さんが見舞いに来てくれた。

18日午前中にリハビリへ。大したことなし。多分、リハビリはもっと歳をとった人の為のものだ。夕方、同僚の渡邊茂さんが見舞いに来てくれた。その時、術前の診断結果を説明してくれることになっていたのですが、渡邊さんとはあまり話せず申し訳なかった。妻と一緒に、ナース・ステーションの一角で、CT画像を見ながら、W、I先生より説明を受けた。それによると Stage Ib の右肺上葉の腺がんでリンパ節、胸膜には及んでいない。他臓器にも転移はない。手術では右肺上葉を全部摘出する。これが標準の手術法とのこと。補足的に説明すると、右肺は上、中、下の三葉がある(左は二葉)。がんが肺に留まり、リンパ節や他の臓器に転移がないと Stage I になる。そして、がんの直径が 3 cm 以下なら Ia, 以上なら Ib に分類される。私のがんは直径が 4cm だったので Ib である。腺がんは肺の末梢部にできやすい、最も多いがんである。

19日は義母の一周忌の法事の日だった。親類には会議ということにしてあり、私は病院で静かにしていることになっていた。朝、寝ていたら灯りがつき、動脈血をとられた。I先生に肺がんの再発率、5年生存率、抗がん剤などについて質問した。5年生存率は70%ほど、補助的な抗がん剤を飲むと生存率が10%ほど上がるとのことだった。CT像で輪郭がぼやけていたことを質問すると、周辺部は初期のがん、中央の核は発達したがんとのことだった。手術後の病理検査で上記の診断が変わる可能性があり、安心するのは早すぎるようだった。翌20日には明日の手術に備えて、午前中に腋の下の毛を剃る。そして、イソジンで身体をキレイにした。夜には下剤を飲んだ。

21日(月)はいよいよ手術の日だ。雪模様で、手術に影響がでないか少し心配した。朝、浣腸をする。便はあまり出なかったが、大丈夫かしらと思った。移動用のベッドで4階の手術室に降りる。沢山の設備が並んでおり、一度に何人もの手術ができるようだった。全身麻酔と硬膜外麻酔の組み合わせで、記憶がはっきりしないが、数字を数えている途中から麻酔が効いたようだった。その後のこと、手術中のことは無論覚えていない。手術は4時間ほどかかったようだった。手術が終わると、直接病室に戻された。シーツ毎ベッドに移されたように記憶している。身体にはいろいろ管がついていた。右腋から背中にかけて切開し、がんを除去したようだった。妻がいたので手を握ってもらい少し安心する。妻は

切除した肺を見たそうだ。

翌 22 日には廊下を歩いた。最近の医療では、痛みは薬で抑え、できるだけ身体を動かすように指導しているようだ。回復を待つ、ということはない。管をつけたまま、廊下を歩いた。病室でレントゲンを撮った。尿管を外し、下半身をキレイにしよう。チョット恥ずかしい（手術のときはいていたパンツやパジャマのズボンはいつの間にか下帯？に変わっていた）。尿が出にくいことに気がついた。膀胱が張って困ったなど思っていたら、そのうちに通るようになった。I 先生によると、前立腺の影響だそうだ。23 日は雪が降った。この日に石鹸で顔を洗ったが、顔の油に負けてしまい、キレイにならなかった。手術が余程苦しく脂汗をかいたのだろうか。車椅子に乗って、1 階にレントゲンを撮りに行った。食事を取り始めたので、栄養の管が外れた。その前に心電図の電極もとれていた。痛み止めの注射を手術当日と翌日？打ってもらったが、よく効いた。夜、痛みがあったので座薬をいれたが、これもよく効いた。この後、痛みがあると座薬を利用した。

24 日にはドレーン、酸素の管がとれた。ドレーンは手術したところにたまる液体などを排出する管である。教授の K 先生もこられて勢いよく管を抜いた。大学院生の橋本照男君が見舞いにきてくれた。25 日には胸についていた痛み止め？の薬剤注入のびんと管が除去された。これで管はすべてなくなった。体には何もついていない。また、傷口に貼っていたテープを剥がした。下半身はシャワーできれいにする。上半身は温かいタオルで拭いてもらう。26 日には胃腸の調子がよくなかった。座薬の影響だろうとのことだった。少しの痛みは我慢し、座薬を使わなかったところ胃腸の調子は回復してきた（27 日）。

28 日の朝、ロビーで採血があった。その後、I 先生に傷口の抜糸？をしてもらった。糸ではなく、金属でとめていた。明日以降いつ退院してもよいとのことだった。早く家に戻りたいので、翌 29 日に退院することを W 先生に報告した。体力はかなり回復しており、X 線を撮りに 1 階に歩いていった。全身シャワー後、妻がドレーンの傷口の消毒法をきくなど退院の準備をした。W, I 先生に今後のことを聞いた。2 月 6 日に退院後始めて診察するが、そのときに病理検査の結果が出ている。それで、もしリンパ節や胸膜にがんが達していると、厳しい化学療法を受けないといけない（鬢が必要になる。先生は言われなかったが、5 年生存率はグッと低くなる）。それがなければ、軽い化学療法を 2 年続けることになるとのことだった。そして、29 日にいよいよ退院。タクシーで自宅に戻った。

その後

退院の連絡をすると、皆さんからおめでとうのメールが来た。感謝。しばらくは自宅で静養するが、できるだけ近所を歩くようにした。胸の痛みや咳がよく出た。2 月 6 日に退院後、初の W 先生の診察があった。血液検査、X 線検査を終えて、先ず、病理検査の結果を知らされた。術前の診断を裏付けるものだった。Stage Ib の右肺上葉に局限した腺癌で、リンパ節、他臓器への転移はない。ホッとした。そして、ドレーンのところの傷の抜糸をした。もう、風呂に浸かってよいとのこと。傷は順調に回復している。確かに痒いだけだ。

胸の痛みは手術で肋間神経にさわったからだろうとのこと、咳は気管支にさわったからだろうとのことだった。いずれ弱まるとのことで、心配する必要はないようだった。軽い抗がん剤の服用について話があり、私は服用することに同意した。5年生存率が10%上がると聞けば、飲まないわけにはいかない。この日から大学や心理学会の常務理事会などに出席することにした。

さて、軽い抗がん剤だが、UFT（テガフルウラシル）というもので、とくに Stage Ib の肺がんに効果があるとのことだった。強くはないが副作用があり、それが列挙されていた。手術から1ヵ月後の2月21日からUFTを飲み始めた。1日朝夕の2回、他に胃の薬を1日3回飲んだ。これを2年間続けることになった。胃腸の調子が悪い時には中止あるいは量を減らすなどしたので、ひどい副作用はなかった。ただ、食べ物の嗜好が変わった。豆腐や納豆は好きでも嫌いでもなかったが、食べにくくなった。現在もこの傾向が多少残っている。UFTを服用している間は、これを飲んでいながら再発はないだろうと勝手に考えていた。2年が経過し服用をやめると少し心細くなった。UFTは心の支えにもなっていたようだ。そのようにして2年が過ぎ、再発や転移を心配していたが、5年の危険期間が何事もなく過ぎ、今年で7年目に入ったところである。

御礼

恐ろしい肺がんであるが、これまで無事に過ごせたのは、手術をしてくださったW先生や、がんを早期に発見してくださった診療所のM先生、その他多くの先生方のおかげで、深く感謝している。また、この間、同僚や学生、友人、学会関係者に多くの迷惑、心配をかけてしまった。卒論発表を控えていた春山由布子、吉満香恵子さん、二人の対応してくれた大学院生の橋本照男君には特に迷惑をおかけした。しかし、皆さんからあたたかい励ましの言葉をいただき、加えてお守りもいただき、恐縮するとともに感謝している（お守りは今も大切に持っている）。とくに霊長研の中村克樹さん、研究仲間の直井望さんは、病は軽い、大丈夫と言い続けてくれた。これがおまじないのように利き、気が楽になることがあった。大変にありがたく思っている。妻には心配をかけた。心細かったと思うが、冷静に対応してくれたことを感謝している。